

30代教師の転

起
んでも
きる!

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める!



説明し過ぎの授業から 生徒が主役の「考えさせる」授業へ

北海道札幌北高校

鶴間乃笛子先生 37歳

私が乗り越えてきたもの

生徒との間に壁を感じる

教職歴8年目の32歳の時、札幌北高校に赴任しました。前任校は進路多様校だったため、「進学校の生徒を満足させられる指導が、自分に出来るだろうか」と、不安で足が震えたことを今でもよく覚えています。

私は生徒に文章を正確に読み取る力をつけるためには、分かりやすい授業でなければならぬと思っていました。評論であれば、難解だと思われる言葉は意味を説明し、論展開を丁寧に追いつつ、筆者の主張を解説していったのです。どの生徒も静かに授業を聞き、発問にも的確に答えてくれました。

しかし、生徒の顔は無表情でした。質問もなく、授業はどうしても一方通行になってしまいます。私は生徒との間に目に見えない壁を感じていました。

「先生の解釈は間違っている!」

「どうにかして進学校の生徒を引き付けたい」。そう思った私は、先輩に相談し、その授業を見学しました。そこには、確かに生徒との信頼関係が築かれている雰囲気がありました。当時の私には指導に大きな違いがあるようには感じられませんでした。戸惑いばかりが深まりましたが、授業は先に

進めなければなりません。私は次第に発問する余裕もなくし、一方的な解説が多くなっていきました。

そんな授業を続けて半年ほど経ったある日のことです。授業中、1人の男子生徒が突然手を挙げ、評論を解説する私に対して、「先生のその解釈は間違っていると思います!」と言い、そう考える理由を語り出しました。彼の整然とした説明を聞いていた周りの生徒も「私は先生の解釈が正しいと思う」などと口々に自分の考えを述べ、生徒同士の議論が始まったのです。私はしばらく呆然と教壇に立ち尽くし、見守るしかありませんでした。見違えるほど目を輝かせて意見を交わす、生徒の表情に目を奪われながら……。

丁寧に説明するだけでは生徒の表情は輝かない



つるま・ぶこ ◎教職歴12年。同校に赴任して6年目。担当教科は国語。1・2学年担当。
北海道札幌北高校 ◎全日制・定時制/普通科/共学。12年度入試では、国公立大は北海道大、北海道教育大、旭川医科大、札幌医科大、東北大、東京大、一橋大、京都大などに238人が合格。私立大は慶應義塾大、早稲田大などに延べ161人が合格。

説明し過ぎていたことへの反省

生徒はなぜ、あれほど生き生きとしていたのか。私は、繰り返しあの日の生徒同士の議論を思い出しながら、彼らが何を求めているかを考え続けました。思い至ったのは、生徒は私に、「自分たちにはこれだけ考えて文章を読む力がある」と伝えたかったのではないかとということです。確かに、それまでの自分の授業を振り返ると、分かりやすく教えようと意識するあまり、説明し過ぎていました。そして考えてみれば、以前見学した先輩の授業も、説明はシンプルだったのです。

そこで私は、説明する内容を精選し、その分、生徒自身に考えさせたり、話し合わせたりする時間を増やしました。そして、生徒から出たどのような意見に対しても、私はすぐには正しいとも間違っているとも言わないように心掛けました。そうした指導を続ける中で、生徒の表情が徐々に変わり、真剣に考えて意見をまとめようとする姿が見られるようになりました。

ところが最近では、新たな課題も感じています。定期考査を採点していると、生徒の答案に、論理の飛躍があったり、問われていることと答えとがかみ合っていないかあったりする解答が多く見られるようになったのです。そうした生徒も、授業では文章の大筋はつかめてい

文章を論理的に読ませるために

ましたから、試験でも結論や主張をおまかに捉えることは出来たでしょう。しかし、筆者がなぜそう考えたかという論理や、筆者の言葉の使い方に表れるニュアンスに対する注意には、随分甘いところがあったのです。そのような生徒の実態が見えてきたことで、彼らがまだまだ文章を感覚に頼って読んでいることに気付きました。

もつと論理を意識して文章を読み取るようにするために、私はもう一度、自分の指導を見直しています。論展開や論拠がしっかりとつかるように、要約を重視したり、問われている内容に對して的確に答えられるように、生徒

同士で答えを校正し合う時間を増やしたりしているのです。オーソドックスな方法ですが、こうした訓練を積み重ねてこそ、難関大の入試を突破するだけの読解力を育める。最近ようやく、そう考えられるようになりました。

言葉は、私たちの最も基本的なコミュニケーションツール。自分の考えや内面の微妙な変化はちよつとした言い回しの違いに表れます。また、公的な場で人と理解し合うためには論理的な言葉遣いが必要です。言葉で表現する力、表現に込められた考えや心情を読み取る力は、「生きる力」と言っても過言ではないはずです。そうした力を生徒が身に付けられるような指導を、今後も追究したいと思っています。

「生きる力」である国語力を育む指導を

鶴間先生 の 授業実践



Q&A

Q 現代文を論理的に読む力を育むために、授業でどのような工夫をしていますか？

A 教科書の文章を120~200字に要約し、確認する時間をつくっています。

まず、各自で要約した後、2~3人の生徒を指名し、自分の要約を黒板に書いてもらいます。それを見ながら、「この具体例は必要ない」「筆者の主張の根拠として、この記述を盛り込むべきだ」というように、生徒同士で話し合えます。

そして、私の要約をプリントで配り、各自に自分の要約を見直させます。生徒の要約を回収し、その中から特徴的なものを3~4つ選び、プリントにして配布することもあります。優れた要約だけでなく、理由がなかったり、論理に飛躍があったりするなど、要素が不足している要約も載せています。

長い文章を短くまとめることは、論展開や論拠をしっかりと把握する訓練になりますし、書くことで表現力も伸ばせると考えています。

Q 古典は、現代文に比べて語句や文法などの説明が多く、生徒が受け身になりがちであると考えられます。生徒を主体的に参加させるために、どのような工夫をしていますか？

A 語句や文法事項を調べ、現代語訳までした上で授業に臨むよう指導しています。予習を徹底させることにより、授業では、語句や文法事項の説明は読解のポイントとなるところに絞れます。その分、内容読解に重点を置くことができ、生徒が主体的に考える姿勢を引き出せると考えています。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す鶴間乃笛子先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスを自由にお願いします。編集部より、鶴間先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp